

初夏の宵、熱氣が軀に絡みついた。

その日、俺は幻想を視た。

現のものとは思えない、現実味が乖離した幻想が、漆黒の夜を濡らす。

俺はその幻想に目を奪われた。一種の陶醉にも近い感情が俺を縛り付ける。

それは悪夢としか云いようのない光景——寒いはずの夜気は今日に限って熔けるように暑く、眼前に広がる光景は蜃気楼のようにさえ思えた。

宵闇の褥を鮮血で染め上げ、彼女の柔らかな肢体は屍体となり倒れていく。

雪原のような肌を蹂躪する紅い華はまるで彼岸華のよう

うに美しく、灼たかな光を喪った双眸は、ただ虚空を見つめ哀しく、彼女の血に濡れた矮軀は静かに地へと沈み込んだ。

泡沫の命が散り往く。

手向けに紅い華を咲かせ、黄金の満月を 贖に彼女の命は今確かに消え失せたのだろう。

残ったのはただ骸だけ。

魂魄を喪失した虚ろな伽藍だ。

それでも柔らかな月光に照らされた亡骸は美しかった。全てを引き裂く痛々しい裂傷も、

月明かりのように柔かな肢体を穢す血液も、もう二度と感情を示さない貌も、

全てが彼女だったものを際立たせる。

例え彼女が笑わなくとも、俺はこの芸術を愛し続けるだろう。

それは一夜の幻想——彼女という俺の半身を喪う悪夢。ようやく彼女が眠りにつく幻想。

その幻想から覚めることもなく、俺は覚醒してしまった。きつと俺は死して尚、今宵の幻想に囚われ続けるだろう。

何処にしようと魂は此の場処、此の時節に幽閉され続けるのだから。

眩い蒼穹に飛翔するための片翼はもうないのだから。幻肢痛に苛まれながら、俺はこの煉獄を生きよう。

それは腐った水溜りで蟲が孵化する初夏の宵——絶痛  
の逆りの中で膿み出された憎悪が描く頹廢の螺旋

六月とはいっても、夜は未だ肌寒い。

日中は暑いがまだまだ酷いものではなく、扇風機を付けずとも過ごせる気温だ。

この辺は本格的な夏になると殺人的猛暑を大サービスしてくるもんだから、まだまだ過ごしやすい限りである。

それどころか、今は少し寒いくらいだ。タンクトップだけでは地肌を撫でる風の冷たさが身に染みる。

夜道をこつこつと小気味のよい靴音を響かせ歩きながら、俺は欠伸一つ、夜空を見上げた。

夜は相変わらず暗い。ていうか暗くて当たり前なんだよな。

前、菊川さんにその言葉を吐いたら、日本がどう頑張っ

たら白夜になるのか論理的に説明してみろ、と嘲笑われた。

いや、そりやそうだけどさ。そんなことで俺を二時間拘束して、詰問するのは止めて欲しい。あれは一種の労災だ  
きつもん  
 と思ひ、心に申請しておく。  
しんせい

——窓口係の俺は菊川さんを恐れて、受理を却下しが  
まどぐちがかり  
 った……。さすが俺、チキンまつしぐら。  
じゆり  
きやつか

ははは、情けなすぎて泣けてくらあ。

風は僅かに湿っている。梅雨入りが近いのか、最近  
しめ  
つゆい  
 が多くなってきた。この調子だと、蒸し暑くなるのももうすぐだな、なんてことを思いながら見上げた空には、星辰が  
ちりば  
 鏤められ黄色い満月が浮かんでいた。

なんか一年前にダブるよなあ。なんだかんだで一周忌。菊川さんから言わせれば一周年だから、そりやそうか。

大分、あの日に近づいてきてる。

ぼつぼつと走ってる車のライトに目を細めながら、俺はほとんど人がいない歩道を歩く。夜中の二時にもなると人影はほとんど見かけず、道路を走る車も少ない。

だから世界は静かだ。まるで誰もいなくなつたかのよう

な静けさ。

でも静謐せいひつというには、心が何か騒いでいた。何かを急ぎ立てられるかのように、心は逸はつっている。

そうこれは静寂せいじやくというよりは消失しょうしつ。俺以外の存在かんしやくがこの空間からいなくなってしまったような感触だ。

等間隔に並ぶ街路樹がいろうじゆ、連なるビル群、点滅する信号——その全てが確かに息づいているのに、人の気配だけが欠如けつじょしている。

通り過ぎる車にさえ誰も乗っていないような錯覚さくかく。ただ箱が勝手に通り過ぎていくよう。

オレンジの光を放つ街灯がいとうが道を照らしている。風のない夜道において、それは唯一ゆいいつの篝火かがりびなわけで、黒と橙だいだいが奇妙きせうに交じり合っていた。

そこに赤、青、黄がたまに明滅している。この無人の夜に恐怖する奴もいる。

でも夜行性の俺から言わせれば、こっちの方が楽しい。道路を歩いても咎とがめられないし、信号を気にする必要もない。

自転車だってかつ飛ばし放題だ。まあ、自転車なんて持っていないですが。

道をのんびりと歩き、十字路じゅうじろを曲がる。ちょうど猫がこっち側の十字路に差し掛かっているとこだった。

黒猫がのそのそと退屈たいくつそうに近づいてくる。金色の目はまるであの空に佇たたずむ月のように丸い。

「こんばんはあつす」

誰かがいれば病氣オブハートだと思われるだろうけど、残念ながら今は誰もいない。誰もいないからこそ、猫に挨拶するんだけどさ。

歩道を歩く猫の軌跡あしあとは赤色。まるでハンコでも押したかのような、天然肉球スタンプだ。

黒猫の軌跡あしあとが赤い点となつて、道の向こうまで伸びている。それはまるで冥府めいふへの道標みちしるべのような禍々まがまがしさ。足を止めずに黒猫を顧かえりみる。

猫の足の裏は真っ赤になっている。鍵尻尾かぎしっぽをふらんふらんと振りながら、猫は十字路を曲がついていきやがった。

……これだから動物って嫌い。足汚れてもお構いなしだ

もんな。

視線を前に戻す——と同時に、視界が脈動する。

——どくん、と

ビルが、街路樹が、信号が、道路が、全ての風景が、鼓動を打つように一度だけ輪郭を歪めた。

同時に視線が霞む。乳白色の霧がかかり、風景の輪郭が宵闇に溶け込み、曖昧になっていく。

「あつれえ……コンタクトずれたか？」

などと言いながら目をこしこしと擦るが、生憎コンタクトは入ってなかったりする。残念ながら俺の視力は両目ともに二・〇だからね。

というわけでムダな現実逃避は止めて、現実に向き合うことにする。まあ、向き合うのは何よりも幻想に近い現実だけだ。

軽く電波入ってる。

これが架空だったら、どれだけよかったことか。こん

な展開、マンガだけにしてほしい限りだ。

俺には異世界トリップ願望なんてねえつてのに。そんな伊勢の海に行きたいね。異世界と伊勢海、なかなか巧くないか？ 座布団一枚持ってきてほしいもんだ。

いや、こんな東北の東端から、遙々三重まで行くのはダルい限りだが。

道の奥、乳白色の霧の紗幕の向こうにか細い影が見えた。今までは見えなかった存在を俺は認識する。

世界がずれた。

いつの間にか、俺がいるべき世界から、足を踏み外してしまったようだ。

ほれ、見ろ。前を見て歩けと言われて、そうした結果、足元への注意が散漫してこの体たらくじゃねえか。

そういや昔、近所おばさんが下を見て歩くなつていつも俺に言ってたなあ、なんてことを思い出す。あのおばさん元氣にしてつかな？

俺に会う度に、ポケットからばらばらんに碎けた煎餅取り出してくれたよな。あん時は嬉しかったけど、あれっ

て単に割れた奴を俺に押し付けてただけじゃないのか？

……さて、眼前に広がるのは幻想の世界。でも俺が現実であることに変わりはなく、何もない無の海に漂う、存在している存在だ。

だから無の中で有だけが浮き彫りにされる。この深い霧の中でも決して薄れることのない存在感となってしまう。だから有である彼女の姿も俺は認識していた。

長い髪の小柄な少女。体は細く、白い肌は透き通っているようだ。

道路の真ん中に立ち尽くし俯いていた顔を、俺の方へと向ける。薄い唇は笑みを模っている。

まるで三日月みたいに鋭利な弧。

そこに確かに存在している有。だというのに、臃な姿はまるで幽——其処に存在しないはずのモノを幻視したような錯覚。

少女が先程まで見ていた視線の先には、何かが倒れ伏している。おおよそ人間が流してはいけない量の血液が、血溜まりとなって力ない体の周囲に広がっていた。

迂闊……さっきの猫の足跡で気付くべきだった。

あの血は、現実の世界の血じゃなかった。現実と幻想の境界がああ辺だったみたいだ。

「ねえ、こんなところで何してるの？」

「街の安全のために巡回警備。夜回り中だ」

嘘だけど。ていうか年齢的に俺は巡回警備に注意される側。

招き入れたのは自分のくせに聞いてくるのはおかしいと思う。でも言ったら、それこそ突撃してきそうなので、何事も穏便に。

「お兄さん、見かけによらず正義感が強いね。でも、そんなことしてると死んじやうよ？ 世の中、いつ殺されるか分からないからね」

見かけによらずってのはどういうことだ。

こう見えても俺は中学校の頃、奉仕活動に献身的に参加したし、買い物のお釣りは全部募金に出してたんだぞ。

でも、それって真偽に関わらず偽善だってことは十分分かってる。この際、嘘かどうかは曖昧にしておこう。

ていうか、殺されるって言ってる時点で、こいつは自分の存在を肯定してるよな。随分とあっさり白状しやがった。  
——や、今から死ぬ奴に何を言っても変わらないと思ってるんだろわか。

どっちにしてもこいつは間違ひなく敵だ。

偶然通りかかって死体を発見した、クールを装い<sup>よそお</sup>すぎるるあどけない少女<sup>ミツキ</sup>っていうわけではない。

家を出る前に、海月<sup>ミヅキ</sup>から送られたメールを思い出す。

『手の動きに気を付けてね』

意味分からん。

「ねえ、お兄さん？ どうして返事してくれないの？ 私、寂しかったんだよ。ねえ、どうして私と話してくれないの？ お兄さん？ 私と遊んでくれないの？」

まるで母親から引き離された<sup>ムスメ</sup>少女のように、もしくは飼いに置いていかれた<sup>こいぬ</sup>仔犬のように、彼女は三日月の笑みのままに問いかけてくる。間違ひなくセンスがあるのは前

者だろうけど、残念ながら俺は緊迫感<sup>きんぱくかん</sup>がないことで有名だ。俺はジーンズのポケットに手突っ込んで、中にあるものを握る。

「悪いけど構ってる暇ねえんだ。明日も早いんだよ。一秒でも遅刻すると、国風文化全開の名前のこっわあい姉ちゃん<sup>こくふうぶんか</sup>のきつつういお仕置きが待ってたんだ。そのクセして早く来たら残念そうな顔しやがる。俺に一体どうしろっていうんだ、あの人は」

て、暇<sup>ぐち</sup>がないって言いながら愚痴<sup>ぐち</sup>ってるぞ俺。

ダメだ。あの人のことは忘れる。

あの人を忘れるってことはつまり、俺のネガティブの五割が消失するってことだ。

気を取り直して、少女を睨<sup>にら</sup>みつける。

「いいか。俺はお前の遊び相手じゃねえ。そしてさらに言う玩具でもねえ。残念だけど今夜のお前は殺される側だ」  
その言葉に少女はさらに酷薄<sup>こくはく</sup>な笑みを零す<sup>こぼ</sup>。可愛い顔をしてる子供にはして欲しくない表情の一つだ。

瞳が、俺を一直線に見つめる。

やばい。完全に目え付けられた。

「お兄さん、私と遊んでくれるんだあ？」

俺の脳内辞書における遊ぶは殺すに近い意味合いになりつつある。

菊川さんも怒ったときは遊んでやるとかって言葉をその手のニュアンスで使うからなあ……。

そして今回も例に漏れないご様子だ。

いや、あんな表情で人形遊びされてもそれはそれで俺が居たたまれない。回れ右して真っ先に逃走したい展開だ。刹那、少女の細い腕が振るわれる。同時に異様な威圧感を全身に覚え、俺は膝を折って身を屈めた。道路の中心から放たれた何かが俺のいる歩道へと飛来し、そして頭上を通り過ぎていく。

ひしやげた音が背後で聞こえ、振り返ると公衆電話のボックスが撓んでいた。しかも中の電話は見事なまでに破壊されている。

それも一箇所からの力によるもんじやない。四方八方、全方位からの力で碎かれたみたいに無惨な壊れ方。

「こういうことかよっ！」

今頃、レンタルしてきたアニメのDVDを見ているだろう海月に怒りを覚える。

説明不足にも程がある。もっと詳細な教えやがらねえなら、俺が死ぬのは時間の問題だろう。

さらに引き込まれるような圧迫感。次の瞬間、すぐ近くにあったガードレールがまさかの大破。耳が痛くなるような歪んだ音を立てて、ガードレールの一部分だけが捻られたように細くなっていた。

くびれたガードレールから俺は咄嗟に走って逃げ出す。背後で今度こそガードレールが完全に破壊された。

どうということだ？

一体どんな能力だよ。少女はあの場所から一步も動いてない。

なのになんで、俺の周囲のものが破壊されていくのか。しかも壊れ方もただの力によるものじゃない。

もっとこう、圧搾するような強大な力。

少女の腕が再び振るわれる。その場で地面を転がり、頭



上を見えない何かが通り過ぎていった。

一体、何だ？ 風圧じやねえし、速すぎて見えないに  
ては着弾が遅い。

細腕が空に掲げられ、一気に振り下ろされる。今までと  
は違う、腕の動き……『手の動きに気をつけて』！

俺は後ろへと飛び下がる。同時に先程までいた道路が  
陥没——描鉢状にへこむ。まるで巨人の拳でも振り下  
ろされたような傷跡が、継ぎ接ぎだらけの道路に付け足さ  
れる。

なるほどな、こういう意味かよ、海月。どっちにしても  
説明不足じゃねえか。

だけどタネは分かってきたぞ。

俺はジーンズのポケットに手を突っ込んで、先程握った  
ものを取り出した。軽く振って閉まっていた刃を出す。

右手に握ったナイフで、俺は走りながら左の掌を切り  
裂く。

激痛が脳を刺激する。その刺激が俺の意識を研ぎ澄ませ、  
傷口の疼くような熱が生きてる実感を与えた。

掌から流れる血を握り締めるように拳を作る。

自分の命の脈動を削り出し、硬質化させていく。イメ  
ージは幼稚園の頃に遊んだ粘土に似ているかもしれない。  
千切りとって、自分好みの形へと変えていく。

手の中に硬い感触——オツケー。

手を開き、手中に生まれた紅い刃を握りなおして、少  
女へと投擲する。空を切り裂くそれは持ち手から刃まで、  
全てが真紅のナイフ。

血色の軌跡を描いたそれは、俺と少女の距離を翔破し心  
臓を狙う。

咄嗟に少女は左手で顔を庇い、右手をナイフへと翳した。  
同時にナイフが叩き落される。直角に下へと曲がり、地  
面に垂直に突き刺さる。落ちたナイフは新たに陥没した  
道路へとぶつかり、粉々に砕け散っていく。

「ああ、やっぱりそうなるか」

多分この調子だと遠距離攻撃は全部弾かれる。となると  
接近戦を仕掛けるしかないかな。

でも、そうずっと今度は避けきれないよな……。

さて距離を置いたら倒せない。距離を詰めたら殺される。

この状況をどう打破しろっていうんだろうね。

左手の中でナイフを三振り膿み出し、そのうちの一回りを少女へと投げた。同時に俺自身も少女へ向かって疾駆する。

少女が怯えながら右手を翳すとナイフが落ちる。しかしその奥にいる俺には一切の傷がない。そもそも力に晒されることもなかった。

さらにもう一回りナイフを投げる。

少女が何を狙っていたとしても、力は触れたものに対して発動してしまう。よっぽど近くにいない限り、飛び火をくらうこともないはずだ。

俺を狙った一撃がガードレールを破砕した。彼女の能力はおそらくかなり直線的なもの。放たれた力は操作できず、ただ触れたものを握り潰す。

俺の前方に障害物となるナイフがあれば俺にまで力は絶対に届かない。この小さな投げナイフひとつが、あいつの能力にとっては障壁だ。

投げたナイフが力にぶつかり、先程と同じように道路へと消えていく。その様を見送って、俺は一気に少女との距離をつめる。

右手が振り払われるが、その流れに合わせて俺は右に移動しながらその一撃をやり過ごす。

さらに左手を振るおうとするがもう遅い。

ここまで近づくことを許してしまつて、俺から逃げられる道理はない。

道理とは道徳でも、倫理でもなく、ただ純粹な論理。そこに善と悪の区別はない。

ただ、行動に基づく結果だけが導き出される。

俺の行動を起因として、結果は生じるだけだ。

少女の細いおやかな腕にナイフが突き刺さった。傷口から血を溢れ出し、目を瞠った少女は引き撃った悲鳴を上げる。

血と音の洪水。腕からは浩浩と命の奔流が漏洩し、激しい痛みに少女は咽ぶ。

思わず俺は嗤ってしまう。それは哄笑と表現すべき高

らかな笑いだっただろう。

よく出来た玩具おもちゃのようだ。透き通るような白は人形のよう  
うで、紅すぎる血は塗料じりょうのようで、人間味が磨り減へって  
いく。

世界から現実味が剥がれ落ち、禁忌きんきに触れる背徳感はいどくかんが快  
感へと昇華しょうかする。

「痛い！ 痛い痛い痛い痛い痛い！」

少女は腕の傷を押さえ、涙を流しながら痛みを言葉へと  
変えて発散はつさんしようとする。その悲痛な声に、俺の笑いが絡  
みつく。

傍はたから見たら悪役はどっちだろう？ ……間違まちがいなく  
俺だな。

どうやつても俺が正義の味方に見えるはずがない。

むしろ巷ちまたで有名な性犯罪者になりにかねない。一応弁解  
しておくと、俺の好みは年上だ。

何にしてもこれで終わりだ。

俺は左の掌を見る。紅い血を流し続ける傷口——ぱくく  
りと開いていたはずなのに、先程よりも幾分か小さくなっ

ている気がした。相変わらず、嫌になる治癒力だ。宿屋で  
一晚休めば、どんな状態でも完全復活するRPGのキャラ  
クターといい勝負だな。

少し出血の量が減ってきたので、もう少し深く傷をつけ  
前の傷と交差させる。そこから溢れ出した血液を垂らし、  
紅い雫をナイフに落とす。

最近はこの痛みに全く抵抗ていこうがない。人間の適応能力バカ  
にできねえ。悲しさのあまり、涙も出ねえぞ、くそ。

職業病しごくびょうということまで申請してみようかな。菊川百合  
恵の暇つぶしの玩具おもちゃつてのも十分仕事だと思う。ていうか、  
国から金をもらいたいほどだ。

「はあ、やれやれ。じゃ、おやすみ」

「や……！ やめて！」

引き撃った悲鳴むじびを上げてても、俺がやめてやる理由はない。  
というわけで無慈悲な俺は死刑を執行しつこう——

「げほっ！」

地を転がった。何かに思いっきり跳ね飛ばされて、無様ぶざまに  
も少女から突き放される。

「……なんだ？」

こんなのはちよつと予想外。

てつきり力の正体は重力かと予想してただけと違うのか？

うえつ、口ん中切った。鉄の味がする。

てかこれ骨の一本や二本折れてんじやねえかな？

「やだ！ 怖い！ いや！ 死にたくない！ 死にたくない！」

叫びに打たれるように俺の体はさらに跳ね上がる。見えない何かを叩きつけられ、俺は予測も出来ず地面を転がっていく。

……くつそ……なんだよ、これ。

「……死にかけじゃん」

口の中に溜まった血を吐き出す。肘も擦り剥いたし、他にもあっちこち切ったみたいだ。

血が大量に流れている。でもこんなもんじゃ足りない。

もつと、もつと血が必要だ。

ちよつと逡巡するけど決断。出し惜しみしてる暇はな

いような気がする。戦力を温存しすぎたあまり負けるなんて、菊川さんに怒られそうだし。

「はあ、しゃあない」

——死のう

俺は静かに右手を上げ、握ったナイフを逆手に持ち直す。ゆっくりと呼吸をして、一度目を瞑り、開いた。

大したことはない一回死ぬだけ。ただそれだけのことだ。

左手を添え、俺は一息で自分の胸にナイフを突き立てる。血でぬるくなつた刃が俺の肌を掻き分け、骨を通り心臓まで届くのが分かった。脈動する心臓が自らの鼓動で、ナイフに刺さりにくる。

心臓を突き破り、案外複雑な構造の器官をめちやめちやに破壊していく。それは機械的な單純作業に近いかもしれない。

命の脈動を耳の奥で聞きながら、  
確かに死んだ。  
鴉丸蓮哉カラスマレンヤという意識そんざいは

×